

## 体験版（一部抜粋）

色情霊にとり憑かれた私の除霊（という名のトロトロえっち♡）を  
してくれたのは妖しいホスト系霊媒師でした

河合あひる

三十七度二分。

平熱にしては少し高く、微熱と呼ぶにはかすかに低い、中途半端な体温。

「うーん、熱はないようだけどね」

と医者は首をひねった。マスクで口もとが隠れているけれど、困惑している様子がひしひしと伝わってくる。私が先ほど記入した問診票に、ふたたび切れ長のするどい視線を落とす。

「症状は、身体の火照りだけなんだよね？ それで何も手につかない、と……更年期障害というには若すぎるし……もつと詳しく見させてくださいね」

服の中に聴診器を滑りこませる。下着越しでも分かる、冷たい感触。胸を圧迫されて、思わず身をよじると、医者は「動かないでね」と制する。その低い声が、甘やかに聞こえる。心臓の音を聞いているのだから、そこにいやらしい気持ちはないはずなのに、私はその無機質な器具で、乳首を

かすめて欲しくてたまらなかった。皮膚の擦れる感覚さえも、容赦なく拾ってしまい、声を抑えるので精一杯だった。散々、身体中を弄られた挙句、「ただの風邪だね」と一蹴された。「念のため、解熱剤を出しておきますから。もし火照りが止まらない場合は、また来てください」

「そんな。もっとよく診てください！」

私は耐えきれず、服も下着も捲りあげて、胸を突きだした。焦らされて震えている乳首が、つん♡つん♡と主張して固くなっている。こんな痴女みたいなこと、本当はしたくない。でも、こうでもしないと真剣に取り合ってもらえないだろう。

「私の身体、どこかおかしいんです。ここに来るまでに、いくつか病院に行きました。みなさん、風邪だと仰って……処方された解熱剤を飲んでみたのですが、一向に効かないんです」

彼は、医者としての仮面が取り払われた表情で、私の身体をまじまじと

見つめる。胸、お腹、おへそ、腰とたどって、また胸に視線が戻る。彼のまなざしが、次第に欲情の気配を帯びて波打った。目で愛撫されているような気がして、私はもじもじと脚をすり合わせる。

「……先生」

背後から冷たい声が刺さる。影のように立っていた女性看護師が、私の服を少し乱雑に戻した。彼女は氷のような目で私たちを睨めつけていた。彼は咳払いをして、ふたたび医師の仮面をつける。

「分かりました。詳しく検査してみましよう。ここよりも大きな病院を紹介しますから、そちらへ行ってみてください」

私はほっと胸を撫でおろし、「ありがとうございます」と喜んだ。が、おそらく検査も徒労に終わるだろうということに、薄々気がついていた。この火照りの原因は、風邪じゃない。私はただ、現実を直視したくない一心で、あらゆる病院に足を運んでいる。だから今回、検査をして異常がなけ

れば、とうとう認めなければならない。

この火照りは、幽霊の仕業だって。

（中略）

除霊は、私の住んでいるアパートで行うこととなった。撮影の機材が次々と運ばれて、あっという間に自室がスタジオになる。

（すごい……スタッフさんたち、テキパキと作業してる……あ、飲み物、出したほうがいいよね。ええと、冷蔵庫に何かあったかな）

あたふたしていると「桜井さん」と呼ばれた。お腹の中が疼くような声。ネロさんだ。動画では分からなかったけれど、ネロさんは思った以上に長身だった。百八十センチはあるかもしれない。それでいて細くてしなやかで、気品にあふれている。ネロさんが私のそばに来て、こう告げる。

「あまり緊張しなくていいですからね。僕がいろいろ質問しますから、それに答えるだけでけっこうです。除霊のときはリラックスして、身を委ねてくださいね。きつと上手いきますから」

彼はまっすぐなまなざしを私に向ける。青みがかった冷たい目。その目で私のことをなぶってほしい。彼の仕草や声色ひとつひとつが、私をくらくらとさせた。今日はどうしちゃったんだろう。もうネロさんは、私に何かしらの術をかけているのだろうか。

「はい、分かりました……」

私は、やましい気持ちになっっているのを悟られるのが怖くて、俯きがちになって返事をした。

撮影が始まり、ソファに私たち二人が座る。目の前のカメラが私たちを、じつと捉えている。はじめは慣れなくて緊張したけど、ネロさんがフオロ―してくれたおかげで、大きなミスをすることなく、自分の出来事を話す

ことができた。

「……なるほど。事情はよく分かりました。サークル活動の一環で、キャンプへ行かれた際に、肝試しをすることとなり……その日から、身体の様子がおかしいと。しかも女性の幽霊にとり憑かれたかもしれないという自覚症状まであります。これはなかなか珍しいパターンですね。Sさんは潜在的に霊感が強い方なのかもしれません」

ネロさんが合掌をした。

「それでは霊視をしていきましょう。Sさん、こちらを向いてただけですか？」

言われた通りにすると、彼は私の顔に手のひらをかざした。その手を上下にゆつくりと振る。ネロさんの深刻そうな表情が見え隠れする。ほどなくして彼がハッと息を呑み、たくましい喉仏がクツと動いた。

「Sさんに憑いている幽霊は……」と言い、沈黙する。心なしか唇が震えて

いる。「ひどく辛い経験をされているようです。懇意にしていた男性に裏切られたために、初めて一夜を過ごしたあのホテルで自ら命を絶ったと……」  
「そんな……」

思わず、か細い声が漏れた。男のひとに裏切られただなんて、私よりもよっぽど酷い目にあっている。こんなに身体が火照るのは、もしかしてその女性が怒っているから？　だからこんなに身体が熱いの？

「では、早速除霊をしましょう」

とネロさんはお香を焚きはじめた。バニラのように甘く、それでいて植物のように透き通っている、身体の奥がむずむずする匂い。続いてネロさんは小瓶を取りだす。透明な液体を、大きくてしなやかな手につけて擦りあわせる。これがネロ様の聖水。私は固唾を飲んだ。

「失礼します」と小声で囁き、私の手を取る。手のひらに彼の指が這い、私の身体がひとりでにビクツと震えた。「怖いですか？」

「はい、少し」

「大丈夫。痛いことはしませんから」

彼の指が手首へと滑る。くつと身体が引き寄せられ、私はネロさんの胸に抱かれる。ふわりと清潔な匂いが漂う。ネロさんは低い声で、ぶつぶつと何かをささやいている。それが蜜蜂の甘美な羽音に聞こえて、耳のなかが犯される。いや、鼓膜を通じて、脳みそまで愛撫されているかのように心地良い。首の後ろに指が触れる。熱い。手の形がはつきりと分かる。私は声を抑えるのに必死だった。

（どうしてこんなに感じちゃうんだろう。早く、早く終わって……♡）

「リラックス、ですよ」ネロさんは吐息まじりに言った。「次、頭のほう、触っていきますね」

ふたたび、低い声でまじないを唱えながら、私の頭を撫でる。頭頂部から後頭部へ。髪の毛にも神経が通っているのではないかと思うほどに感じ

て、ピク♡ピク♡と腰が跳ねる。息が荒くなり、苦しいやら気持ちがいいやらで、訳が分からなくなりそうだった。

「あっ……ふぁっ……んう……♡」

カメラのレンズが鈍くひかった。撮影されているのだと意識すればするほど、じん♡じん♡と脚のあいだが疼いて仕方がなくなる。ネロさんは私をソファへ横たわらせた。ずっしりと体重が増えたように感じ、指一本も動かせない。ネロさんは眉を顰めながら、私の全身に、するどいまなざしを行使渡らせた。その視線だけで、ますます下着が濡れる。

「そうです。そのまま楽にしてください。声、抑えなくていいですかね」

「んぁっ……ごめっ……なさ、い……♡」

「いいんです。完全に女性の霊が、桜井さんのなかに入り込んでいますね。今、引っ張り出そうとしているのですが、その反動で声が出るのでしょう。

何も恥ずかしいことはありませんよ」

ネロさんの滑らかな指先が、私の身体の輪郭をなぞる。唱えているおまじないが次第に力強いものになったが、その手つきは繊細なまま、陶器か何かを扱うようだった。私は、彼の指が間違つて、股のあいだに入るところを想像した。でも、彼はその部分を巧妙に避けて、全く性的に感じないところばかりを触った。

「あっ……はあっ……♡」

「辛いですよね。もう少し、あともう少しで終わりますから」

ネロさんは最後に私の背中を大きく叩いた。続いて二発。その振動さえも気持ちよく、私は呻くことしかできなかった。沈黙が流れ、ネロさんが立ち上がって、こう宣言した。

「これで除霊は終了です」

私は悶えながらも困惑した。本当にこれでおしまいなの？ 全然、熱が

引いている感じがしない。それ以上に、ネロさんの色香に当てられて、ますます身体が火照って仕方がないのに。

「最後に、これを握っていてください」

と差し出されたのは、真っ白な長方形の紙に文字が書かれているお札だった。そつとネロさんが耳打ちする。「僕の力が込められた代物です。僕がいいと言うまで、離さないでください」

そのお札を握ると、不思議と熱が引いたような気がした。久しぶりの平熱に、私は涙が出そうなほど嬉しかった。

無事に撮影が終わった。他のスタッフを帰したあと、ネロさんが、私に話があるというので、このまま残ることになった。

「あの、ありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか」

「そのことなんですが」ネロさんが気まずそうに切り出した。「実はまだ、除霊できていないのです」

「え！」私はお札をぎゅっと握りしめた。「あの、除霊するのが難しい幽霊なんでしょうか……？」

「いえ、そのなんと言いますか……」ネロさんが言葉を選んでいる。何か良くない幽霊だったんじゃないかと私は身構えた。「非常に申し上げにくいのですが、桜井さんに取り憑いている幽霊は、その……色情霊でして」

「シキジヨウレイ？」

「いやらしいことに未練のある幽霊、ということですよ」ネロさんは恐る恐るといった具合に話す。「先ほどは撮影の手前でしたので、恋人の裏切りにより自ら命を絶ったと、そうお話したのですが、本当は違います。腹上死です」

「そんな……」

「『私を……に連れてって』。以前、桜井さんが気にされていた幽霊の言葉ですが、これは……『絶頂』に連れてって、だと思います。それだけ未練

が強い方なのです」

そうしてネロさんは私の手元に視線を落とした。

「先ほど渡したお札。これを持っていれば、少しは症状が和らぐでしょう。ですがその場しのぎです。お札を手放してみてください。すぐにもとの状態に戻ってしまいますから」

言われた通りにすると、また私の身体は、芯から熱を持ちはじめた。ジク♡ジク♡と内側が犯されているのを感じて、息が上がる。

「そんな。じゃあ、どうしたら良いんですか？」

ネロさんは唇を嚙んだ。赤い唇が、ますます真っ赤に色づく。

「根本的な解決方法は性行為です」

「えっ？」何かの冗談かと思った。「嘘ですよね？」

「いえ……残念ながら本当です。色情霊に気に入られてしまった場合、取り憑かれた人間も同様の行為をしなければ、払うことができないのです」

私は気が遠くなるような思いがした。性行為って、セックスする相手を見つけないといけないってこと？

「ですが、そこまでは僕にはできません。最後までお力添えができず、本当に申し訳ございません」

彼は深々と頭を下げた。私は呆然とその様子を見ていた。ふいに先輩のことが頭によぎる。力強くラケットを振る姿。肌が上気して、汗が流れて……そういうことは先輩としてみたかった。

でも今は、この熱をどうにかして欲しくてたまらない。

私はネロさんのスーツの袖を引いた。彼が顔を上げる。困惑した顔もきれいだと思った。

「そういう相手は、私にはいません。好きだった先輩には、彼女がいたんです。私にはもう、そういうひとを見つける自信がありません」

「そんなことはありませんよ。桜井さん、魅力的ですし、すぐに見つかり

ます」

「魅力的？　そうですか？　本当にそう思ってくださいますか？　なら、

ネロさんが抱いてくれますか？」

彼は静かにかぶりを振った。

「いえ、僕にはできません。信用問題に関わるのです」

私は掴んでいた袖を伝って、彼の手を取った。その手をスカートの下に導く。

「除霊のときから、ずっとこんな感じなんです」そう言いながら、彼のこわばった指を擦りつけた。「お願いします、ネロさん」

彼は、ずっと弱々しげに首を横に振っていたが、手を振り解こうとはしなかった。私は充血しているであろうクリトリスを宥めた。ネロさんの爪が、カリッ♡と下着に引っかかる。

「んうっ♡　はあ♡　はあ♡」

自分のものとは全然違う、男のひとの滑らかな指。擦りつければ擦りつけるほど、ますます欲しくなる。私は夢中で動かしていた。

「ああっ♡ んああっ♡」

最近は自分で構ってばかりいるので、どう触れば気持ち良いのかが分かり、あっけなく絶頂する。痙攣しているクリトリスを鎮めるために押つける。その震えすらも快感になって、ますます敏感になる。いつもなら、したあとは少し落ち着くんだけど、今日はおさまるところか、どんどん熱が溢れてくる。

「ネロさん……♡」ひとりでに腰がくね♡くね♡と動いてしまうのを、止めることができない。「もっ♡と♡ きもちよくしてほしいです♡♡」

ネロさんの息が上がっている。霊媒師としての仮面はとくに剥がれ落ちていて、獣のようなまなざしで私を犯している。そして、私との情事を思い描いては我にかえり、わずかに残った理性を保っているようだった。

「桜井さん。あまり煽らないでください」彼は下着の隙間から指をねじ込んで、くちゅ♡と音を鳴らしながら、私の入口に触れた。「僕、どうしたらいいか……」

そう言いつつも、指を中に入れる。長くて太い指。自分では届かなかったところを、彼がとん♡とん♡と叩いた。

「んっ♡ ああっ♡」あまりの気持ちよさに身悶えする。「きもちい♡ おく♡ もっとしてっ、ください♡」

彼は堪えるような表情をしながら掻き回す。膣に気持ちいい刺激が溜まっていて、すぐに弾けた。自分の身体が彼の指によって作り替えられていくような気がした。

「ひとつ確認なのですが……」彼は膣をかき混ぜたまま尋ねる。「桜井さんに取り憑いた幽霊を除霊するには、性行為をしなくてはならない。ここまではいいですね？」

「はあ♡ んう♡ はい……♡」

「ここという性行為は……僕の精液を、あなたの中に出すこと……ここまではじめて、除霊することができんです。やめるなら、今ですよ？」  
その話をしている間にも、私の中は細やかな指の動きを拾って収縮する。また絶頂を迎えて呻いた。子宮口がひく♡ひく♡と切なく収縮している。精液が欲しくて震えているのが、体感的に分かった。

「大丈夫です。今日は、しても大丈夫な日なんです」  
本当だったが、ネロさんは訝しそうに私をみる。

「……信じていいんですね？」

「はい、もちろんです。ネロさん……私、ほんとに、好きな先輩にして欲しかったんです。抱いて欲しかったんです」

「ええ。きつと、あなたのその気持ちにつけ込んだのです。幽霊は、人間の心の隙を逃しませんから」

だからこんなふうになっているのは、私がエッチだからじゃなくて、幽霊のせい。そういうふうに言っているように聞こえた。なら、この気持ちを、先輩の未練を断ち切ることができたら、もう二度と取り憑かれることはなくなるのだろうか。

「あの」私は意を決した。「先輩のことを忘れさせてくださいませんか？他の知らないひとでは嫌なんです。あなたがいい」

私はネロさんの唇にキスをした。ふに♡と、まるでケーキのスポンジのような感触。ネロさんの形の良い目を見つめながら、その柔らかさを味わった。ふいに、ぬるり♡と舌を入れられる。

「ふぁ♡ んう♡ んんっ♡」

不思議と蜂蜜のような甘い味がする。花に寄ってくる蜜蜂のような気持ちだ。

「甘い♡ んんっ♡ おい、しい♡」

「はあ……はあ……おそらく、その味覚も幽霊の仕業です。容易に性交渉に持っていけるよう、感覚をすっかり変えてしまふんです」

ネロさんの顔つきもとろんとしている。それなのにまだ躊躇っているようだった。私は腰のあたりをまさぐって、彼のベルトを外そうとした。

「ちょっと、待ってください」と彼は押さえた。「自分でやりますから」

そして上着を脱いで、ネクタイを緩めた。上半身は黒シャツ一枚になり、下半身はベルトを外してズボンを下ろす。深い青色の品の良い下着を履いていた。

「桜井さん、最後にひとつだけ。これはあくまで除霊、ですからね。セックスではありません。僕はあなたを救うために、このような行為をしているんです。そのところ、ご理解いただけますか？」

まるで自分にもそう言い聞かせるようにして、彼は言った。私は躊躇いがちに頷く。ネロさんの事務的な言い回しが、少し悲しいと思ってしまう

た。

「では、ベッドへ行きましょう。いいですね？」

今度はネロさんの方からキスをして、ブラウスや、キャミソールや、スカート、ショーツ、身につけているもの全てを脱がされながら、ベッドへ向かった。押し倒されて、口の中が犯される。いつまでも貪っていたかった。

「桜井さん。もう、入れますよ」

ネロさんが自分の下着を下ろす。長くてスラリとした性器が、痛いくらいにそり返っていて、お腹についてしまいそうだった。彼が私の脚を開いて、ゆっくりと挿入する。すぐに奥の気持ちいいところに届いて、グッ♡グッ♡と押し込められるとたまらなかった。

「あっ♡ あっ♡ ああっ♡ そこっ♡ いっぱい、して♡」

粘り気のある愛液が、彼のもので掻き出されてグチュ♡グチュ♡と音を

立てる。お尻のほうまで温かいものが伝って、濡れているのが分かった。

「あっ♡ んっ♡ んんっ♡」

「やばっ……」

ネロさんは低く唸るように言って、ふいに腰を止めた。奥まで入れたまま「はあ、はあ」と息を乱して快楽に堪えている。私は切なくなつて、腰を揺らした。

「んっ♡ やめないで、ください♡」

カリが気持ちいいところを引っ搔いて、軽くイキそうになる。もっと味わいたくなつて彼のものを締めつけると、ネロさんが懇願した。

「動かさないで。まだ、出したくない」

動画の中のスマートな彼が、こんなにも余裕がなくなるなんて。私はそんなネロさんの表情をもっと見たいと思つてしまった。

「はあ♡ はあ♡ ネロさん♡ はやく、ください♡」

私は、彼の手を、お腹に導いた。ネロさんのきれいな顔が歪む。彼は私に覆い被さって、腰を激しく打ちつけた。

「ああっ♡ あああっ♡ いいッ♡」

パン♡パン♡と肌同士のぶつかる音が、部屋中に響く。私は彼のシャツに縋って、振り落とされないようにしがみついた。

「桜井さん、出します。受け止めてください」

ずっぽり♡と奥まで入れて、彼は目を閉じた。熱いものがドク♡ドク♡となかに溢れる。発射された精液が、奥の気持ちの良いところをかすめていく。その刺激でもイってしまい、精液を飲み下そうとして子宮口が波打つように震えているのを感じた。

（すっごい、気持ちいい……♡ セックスってこんなに気持ちいいものなの？ それともこれも幽霊の仕業？）

ぼんやりとした意識のなか、あれだけ渴望していた欲が、スツと溶けて

いくのが分かった。誰かが密着していたような暑さが消え、次第に、火照りがおさまってくるのを感じる。

「ネロさん……」私は晴れやかな気持ちになって言った。「体温がもとに戻ったような気がします」

「ええ、除霊は成功しました」

「本当にありがとうございます」

「ええ、本当によかったです」

ネロさんは自身を引き抜こうとしなかった。私の頭は次第に冴えていく。明るい部屋。裸体。大きく開かれている脚。ネロさんの整った顔。カッと顔が熱くなる。

「あの、そろそろ、終わりにしますか……？ 私、この格好、恥ずかしくて」

「恥ずかしい？」ネロさんは掠れた声で言った。「何を恥ずかしがることが

あるのです？　桜井さん。あなたはきれいです。きれいなあなたをもっと味わいたい。いけませんか？」

彼の身体が、どんどん熱を帯びて、肌にじつとりと汗がまとわりついている。私は恐る恐る尋ねた。

「あの、ネロさんに色情霊が乗り移ったなんてこと、ありませんよね？」  
ネロさんは困ったように笑った。

「桜井さん、もう少し付き合っただけませんか？」

急に律動をはじめて、私はたまらずに声を漏らした。

「迂闊でした。相手は女性の幽霊ですので、とり憑く対象も女性のみだと、てつきり思っていたんです。まさか僕が……」

「あっ♡ んんっ♡ はぁ♡ ああっ♡」

「ゆうりさん」いきなり名前を呼ばれてびくっ♡とする。ネロさんは首筋に顔を近づけた。「ああ、いやらしい匂いがする」私の髪の毛を、かき混ぜ

るようにしながら、指を埋める。「僕はこの匂いが好きです。生きているひとが発する甘くて濃密な匂い。すごく安心する」

彼は私の唇に、自分の舌をねじこんだ。先ほどの蜂蜜のような味はしなかった。私はネロさんの舌の熱さだけを感じながら、その動きに応えつつけた。

「はあ♡ はあ♡ んうう♡ んあ♡」

唇を離すと、スツと糸が引いた。ネロさんは優しく私の口もとを拭った。

「美味しい。ゆうりさんの口のなか、すごく美味しい。桃のような、みずみずしい味がします。ゆうりさんらしい果物です」

彼は恍惚とした顔をしながら微笑んだ。ふたたび首筋に顔を埋めてキスをして、それが少しずつ下へ下へとくだる。乳房のあいだに唇を落とすと、

「はあ……可愛い」そう言って、ネロさんは乳首を口に含んだ。

「はっ♡ ああっ♡ あっ♡ んあっ♡」

乳首に与えつづける快樂が、膣内にも伝わり、キュン♡キュン♡と彼のものを締める。ネロさんのものがときおり震え、その振動でイッてしまいうるになる。

「ゆうりさんの身体、どこもかしこも美味しいです。食べてしまいたい」乳首に軽く歯を立てる。痛いはずなのに、舌の熱でじんわりと溶かされて、するどい快樂が全身を駆け巡った。

「ネロさん♡♡ だめ♡♡ だめ♡♡」

身体がグッ♡とのけぞり、乳首がジン♡ジン♡と疼く。私の中はまた、ネロさんの精液が欲しくて、艶かしく奥へ奥へと誘った。

「ゆうりさんはエッチなひとですね」と彼は自分の唇を舐めた。「もう幽霊に取り憑かれていないんですよ。あなたは、自分の意志でこの行為をしているんです。お分かりですか？」

そう。なのに、どうしてこんなに気持ちがいいんだろう。どうしてもっ

と奥まで欲しいと思ってしまふんだろう。私は、そんな自分の身体が自分のものではなくってしまふような感覚を、認めたくなかった。

「ちがっ♡ してなっ♡ わたし、えっちじゃ……♡」

お腹をグッ♡と押され、確かめるように揺らされる。外からも中からも同時に擦られ、その圧迫感がすごく気持ち良かった。

「素直じゃないですね。ゆうりさんのここは、僕のが欲しい♡欲しい♡って震えていますよ。それとも……本当にいらないんですか？」

つつっ♡と彼は自身を引き抜こうとする。中にぽっかりとできつつある空洞を意識してしまい、切なさのあまり、私は彼の袖をつかんだ。

「あっ♡ まって♡ まって♡」

「なにがですか？ だって、ゆうりさんにはもう必要ないですよね、僕の精液」

「いるっ♡ ほしいっ♡ ネロさんの、ほしいですっ♡」

「ふふっ……」

ネロさんのまなざしが一瞬、支配的なものになって、そのまま彼自身をズン♡と一気に貫いた。

「あああっ♡ んんうッ♡♡」

身体がビク♡ビク♡と反応して、快楽が弾けた。目の前がチカ♡チカ♡とひかり、内股が痙攣して腰が浮く。勝手に足が閉じてしまうのを、ネロさんは無理やりこじ開けた。

「普通は一回突かれただけじゃイかないですよ。ゆうりさんが特別エツチなんです」

ねぶるように腰を動かしながら、彼はクリトリスを指で扱く。先ほどイカされたときの余韻も相まって、するどい快感に私の身体がのたうつ。

「ああっ♡ あああっ♡ また♡」

「また？」彼は呆れたような、嬉しいような声を出した。「僕、あなたみた

いな、だらしが無いひととするの、生まれて初めてですよ」

ひどいことを言われているのに、今はそれすらも感じてしまう。

「ごめんなさい♡　だらしのない、なおしますからっ♡」

「こんなにすぐにイクんじゃあ、説得力に欠けます。もっと堪えてください」

彼は動かすのをやめた。思わず私が下半身を揺らすと、快楽ばかりを求めるところもない腰を、彼がグッ♡と掴んだ。

※体験版はここまでです。続きは製品版にてお楽しみください♡